

老後の時間割表（後編）

吉澤 稔雄

森の中。ふと見上げれば、木々の梢越しの青く澄んだ空の高みを白い筋雲がさらさらと流れていた。秋の彼岸が過ぎ、蟬たちの声も絶えてようやく静かになった森では、時折鳥たちの囀りが聞こえてくるばかり。僅かに色褪せはじめた広葉樹の葉叢が風にそよぎ、その枝先にしがみついた蟬の抜け殻の揺れる様を見れば、過ぎ去った夏の想い出も甦ってくる。

……あれは二人の息子たちがまだ小学生の頃のことであった。そう、二十年前ほどの夏、息子たちとたまたま蟬捕りにこの森にやって来て、アブラゼミやニイニゼミの鳴きしきる中、不意にシャーシャーシャーという独特な鳴き声を聞いたのだった。クマゼミに違いなかった。しかし、もともと東京にクマゼミはいなかったはずで、私はその声にならず驚いた。「あれ、クマゼミだよね？」

小学校四年生の長男がいささか興奮気味に声を抑えて言った。

「クマゼミ？ あーん、クマゼミ欲しいよお」
小学校一年生の次男が即座に兄の言葉に反応した。



「シート！」

長男が慌てて口元に人差し指を立てて弟を制止した。

「静かにしないとクマゼミが逃げるだろ」

実際、クマゼミは人の気配に敏感な蝉で、人間の急な動きや僅かな物音にも感応して鳴き止み、あるいは飛んで逃げてしまう。

私たち三人はゆつくりと、物音を立てないよう注意を払いながら、クマゼミの鳴いている樫の大木に近づいていった。しかし、鳴き声は聞こえてくるものの、その姿は容易には見えない。目を凝らして太い幹を辿っていくと、途中数匹のアブラゼミがすぐに目に留まったが、クマゼミの姿はなかった。もつと高い所にいるのだろう。仮に姿が見えたとしても、捕虫網の届かない高みにいるに違いなかった。

不意に次男がクシャミをした。次男は慌てて口を手で押さえたが、時すでに遅し。クマゼミは鳴き止み、その消息を絶った。そして、アブラゼミの鳴き声が時雨のように降り注いできて、私たち親子を包み込んだ。

……それにしても、もともといないはずのク

マゼミがこの地にいるのは何故なのか？ 思えばこの森は人工の森であった。昔、この辺り一帯は田や畑の広がる広大な農地だったのだ。それを整地造成して公園にしたわけだが、その際、大量の樹木を植林して森をつくった。樹木は遠方から運ばれてきたものも多かったのだろう。その根方の土の中にクマゼミの幼虫が潜んでいたのに違いない。数年を経てその幼虫は羽化し、世代を繋ぎ、秘かに繁殖し続けてきた。まだ数は多くはない。しかし、毎年その鳴き声が聞こえてくることから、クマゼミは確実にこの森に根付いたと言つてよさそうだ。

東京にもクマゼミが棲息するようになった。それはつまり時代が変わったということなのかもしれない。長く生きてきたからこそ、それがわかる。

勤めを辞めてからというものの、私は足繁くこの広大な公園の森に通いはじめた。もともと歩くことが好きで、会社勤めをしていた間、帰宅する際は毎日西新井駅から自宅まで三キロほどの道のりを歩いてきた。十六年ほど続いた習慣だ。だから、勤めを辞めた後もなるべく歩くようにしようと思っていた。そこで公園通いを始めたというわけだ。自宅から公園の中にある

舎人公園駅までがちょうど三キロだった。往復で六キロだが、広い公園内の移動を含めると七キロから八キロほど歩くことになる。私は好んで公園内の森の中を歩いた。

初めのうちはただの気晴らしのつもりだった。リタイア後は日々のタイム・スケジュールを細かく決めて、それに従って生活していかうと考えてはいたのだが、せつかく自由の身になれたのだから、当面は時間に縛られることなく気随気ままに生きてみようと思つたのだ。そして暇潰しに近所を徘徊するうちに、足は自然とその公園へと向かった。

平日の公園来園者の大半は老人である。ウォーキングやジョギングをする老人たち、池で釣りをする老人たち、大きな望遠レンズをつけたカメラと三脚を持って野鳥の写真を撮る老人たち、公園内の売店のテラス席で世間話に興じる老人たち、池の畔や森の草地などに置かれたベンチに腰掛けて一人ぼつねんと眼前の風景を見つめている老人たちなどがあるかと思うと、中には法螺貝の笛を持参してひたすらブォーッピエーッと吹き鳴らしている老人もいたりする。いずれも徒歩や自転車ややって来る近隣の住人で、ほぼ毎日のようにやって来る人がほとんどのようだった。わざわざ遠方から電車

やバスに乗って来る人は稀である。

老人たちは病院に行く日を除いて毎日ほぼ同じ時間にやって来る。数回足を運ぶうちにそれがわかった。毎日同じ時間に行ってみると、見覚えのある顔が毎日それぞれの定位置にあった。自ずと顔見知りとなり、そのうち挨拶を交わすようにもなった。

しかし、私自身は彼らとは一定の距離をおきたいと思い、挨拶以上の言葉を交わすことは控えていた。無駄話をして時間を取られることを危惧していたのだ。気随気ままに生きようとは思つたものの、私はここでもまた定期的に家を出、定期的に公園内のポイントを通過して、定期的に帰宅しようとしていたのだ。行動が習慣化すると時間の枠を設定してそれを定式化したくなる。それが私の性向だ。しかし、これでは気随気ままとは言えないではないか。我が事ながら苦笑せざるを得なかった。

十月に入って間もないある日のこと、公園の森の中でしゃがみこみ、スマートフォンでキノコの写真を撮っていると、一人の老人に声をかけられた。

「何撮ってるの？」

いきなり声をかけられて振り返ると、小柄で

温和そうな老人が立っていた。その老人は私もかなり年上のように思われた。

「キノコをね、撮っているんですよ」

「へえ、キノコ？」

「そう。この森には探せば結構いろんな種類のキノコが生えているんですよ。今撮っていたのはテングダケ。たぶん……」

「何処かのクラブに入ってるの？」

「写真のクラブですか？ いや、入ってないですよ。……池の周辺にいますよね、大きな望遠レンズをつけたカメラを持った人たちが。私のカメラはこれですから」

そう言って私は老人に安物のスマートフォンの見せた。野鳥マニアの高価な一眼レフとは比べべくもない。

「……あたしやね、昭和九年の生まれで、今年で八十七になるんですわ」

突然老人は話題を変えて、自分自身のことを語りはじめた。私は少し身構えて腕時計を見た。

「へえ、そうなんですか。それにしては随分お元気そうじゃないですか」

「なあに、足腰はまだ自由が利くが、老いぼれの爺ですわ。今日はね、天気がいいもんだから、ここまで歩いてやって来たのよ」

「ご家族はいらっしゃるんでしょう？」

「倅や娘たちはとっくに家を出てるし、今は婆さんと二人暮らし。孫たちもすっかり大きくなってジジバアのところじゃ来もしねえ。家に居てもね、婆さん相手じゃ今更話すこともねえし、それでこうやって散歩に来てるんですわ。あんだ、よくこの公園に来るの？」

「暇ですからね、今のところ毎日通って来てますよ」

私は再び腕時計を見た。ここのポイントの通過予定時刻を五分余り過ぎていた。

「ああ、引き留めてわかったね」

「いやいや、そんなことはないですよ」

「久しぶりにこうして人と話をするのができてよかった。ありがとうね」

老人はさも嬉しそうに顔を崩して人懐こそうな笑みを浮かべた。

「それじゃ、また……」

私は一礼してその場を後にし、ゆっくりと駅の方へと向かった。少し行って振り返ると、老人はまだその場から動かず、私を見送るようにこつちを見て立っていた。私はもう一度礼をして、今度は足早に駅に向かって歩き始めた。

隠居生活に入って一ヶ月ほど無計画に気ままな日々を過ごした後、この先どうやって一日

を過ごすかを考えた。

つらつら考えた結果、午前中はネットで情報収集と散歩、昼過ぎから夕方まで読書、そして夜はネット上の公開日記の記事の書き込みと最近始めたばかりのブログの記事作成……とまあ、一応そんなおおまかな行動予定をきめてみた次第である。読書については、英語の本やフランス語の本、そして日本語の本を気の向くままに読んでみようと思っていた。今更語学を勉強するつもりなどないから、ただ読み流すだけ。わからない部分があっても気にせず、調べたりもしない。英語の本に飽きたらフランス語の本を、それにも飽きたら日本語の本を読もうと気楽に構えることにした。時間割表というには大雑把だが、何の成果も求められないことのない余生の過ごし方としてはこんな大まかな指針でよいのではないだろうか。この他にも自身のホームページのリニューアルとか、パソコンのパーツや周辺機器の入れ替えとか、時に原稿を書いたり、雑誌の編集をしたりと、不定期にやりたいことはいくつもあるもので、その時はこの指針には拘らないつもりでいた。

とりあえずこの指針をエクセルで表にして印刷し、それを常用するデスクトップ・パソコンの筐体側面に磁石で留めておいた。すると、

それを見た妻の静子が私に尋ねた。

「英語・フランス語・国語」ってというのはわかるんだけど、一時限目の〈情報〉って何のことなの？」

「それはね、情報収集のこと。ネットでニュースを見たり、いろいろ調べたりするのさ」

「それじゃあ、二時限目の〈体育〉は？」

「〈体育〉は身体を動かすこと。俺の場合は散歩だな」

「ふーん。それで午後一の〈リラクゼーション〉っていうのは？」

「そりゃあ昼寝のことだ」

「で、その次の〈統語法〉って何？ 聞いたことのない言葉だけど」

「フランス語でサンタクス、英語でシンタクス」

「うーん、サンタダのシンタダのって、ますますわからないわね」

「それはだな、言葉を組み合わせる句・節・文をつくるときの規則のことね。またはその規則について研究することだ。わかりやすく言うただね、文章表現技法みたいなもんだな。俺は毎日文章を書いてるだろう、ネットの掲示板とかブログとかで。つまり、それだ」

「結局、〈体育〉と〈リラクゼーション〉以外は全部パソコン使うんじゃないの。〈英語・フ

ランス語・国語〉っていうのも、パソコンで本を読むだけのことなんですよ？」

「まあね、ネット上で公開されている著作権切れの無料本を読むんだから、そういうことになるね」

「お父さん、お父さん、大事な科目がひとつ抜けているわよ」

あらためて表を見た後、少し考えてから静子が言った。

「何だい、大事な科目って？」

「〈家庭科〉よ。家事とか炊事とか。お父さんはもうこの先ずっと暇なんだから、家の事も少しはやってくれないと……」

時間割表は藪蛇だったかもしれない。

「それじゃあ、明道君の出所を祝って乾杯と行こう！」

久々に高校時代の仲間五人が集まった席で幹事役の守谷が言った。所は浅草一丁目一番一号、言わずと知れた神谷バーの三階「割烹神谷」である。

「出所じゃねえよ。周りの人が驚くだろう」

私がすかさず異議を唱えると、一同が声を上げて笑った。

十五の歳に同じ高校で識り合って五十五年

も付き合い続けてきた仲間たちである。高校を卒業してそれぞれ別々の大学に進んだが、その後も皆で旅行に行ったり、酒を飲んだりを年に数回続けてきた。数年前からほぼ毎月定期的に集まっては飲み会をやってきたが、つい最近まで勤めを続けていた私は仕事の関係で毎回は出席することができなかったのだ。

「まあまあ、やつと自由の身になれたんだから、出所みたいなもんじゃないか」

十年前に大手印刷会社を定年退職し、以後世捨て人と称して一人隠遁生活を送っている俳人の立川が言った。

「晴れて自由の身になれたからこそ、こうして平日の昼間に集まって酒が飲める。これぞ老人の特権だよ」

雇用延長で五年前まで印刷用インクのメーカーに勤めていた山下が応じた。

「まあ、とにかく乾杯だ」

守谷の提言で皆がビールのジョッキを手にとった。

「カンパイッ！」

五人全員が唱和して、それぞれのジョッキを軽く触れ合わせた。

「明道君、おめでどう。長いことお疲れさまでした」

五人の中の紅一点、元薬剤師の諏方女史が私に
「これです。全員の言葉をかけてくれた。」

「これで全員無職になったのか。何だ、まだ働いてるのは俺だけだよ」

運送会社を経営している守谷が嘆くと、さすが立川が言い返す。

「何言ってるんだ。おめえは仕事なんかしてねえくせに。毎日犬の餌やりに会社に行ってる、あとはお茶飲んで、飯食って帰ってくるだけじゃねえか」

「まあ、いいじゃないか」

守谷はへらへら笑うばかりで否定も反論もしない。半世紀を超える長い付き合いだから、言葉は乱暴でも気心は知れており、角は立たない。皆白髪頭になって歳はとつても、会えばたちまち昔の少年少女の自分に戻っている。

「それにしても、みんな七十までよくぞ生きてきたよねえ」

山下が感慨深そうに言った。

「たしかにね、自分の親父の享年はどうに超えた。でも、俺は自分が七十になったということがまだ信じられないんだよ」

私は言った。実際、七十年も生きてきたというものが事実だとしても、七十歳の老人としての自覚が私にはなかった。

「そうね、みんなまだ若く見えるもの。わたしだって、自分がおばあちゃんだなんて思っていないし。まあ、個人的な感想だけだね」

諏方女史がそう言って笑った。

「あのさ、磯野浪平さんがいくつだか知ってる？ 五十四歳だよ。それから、バカボンパパなんか、あれで四十一だからね。実際、昔の人は老けるのが早かったんだよ」

山下は言った。

「そもそもさ、歳をとるってどういうことだよ。十年前と何か変わった点はあるか？」

立川が皆にそう尋ねると、

「個人差はあるだろうけど、パーツが経年劣化する。僕は去年上の前歯が二本抜けた」

山下がそう言ってニツと笑い、ブリッジの部分入歯を見せた。

「いやいや、髪が白く薄くなるのは当たり前。鼻毛の伸びも早くなって、耳毛も伸びてくりゃあ、目も霞んでくる」

守谷が応じた。

「そう言や、先日自分の眉毛が異様に長く伸びているのに気づいて驚いたね。これはショックだった」

私が応じた。

「それとき、足の踵とか親指とか、ちよつと手

入れを怠ると、何かの拍子で突然ピツときて罅割れを起こすことってない？ あれって痛いよね」

諏方女史が顔をしかめて言った。

「動脈硬化に血圧上昇。歳とりやムスコも言うことあ聞かなくなる。年寄りあるあるだね」

立川が茶化すように言うのと、皆はニヤリと笑って下を向いた。

「天人五衰だ、天人五衰。衣裳垢膩（えししようこうじ）、頭上華萎（ずじようかい）、身体臭穢（しんたいしゅうわい）……あと何だっけ？」

守谷が言い淀んでいると、立川が引き取った。「腋下汗出（えきげかんしゅつ）、不樂本座（ふらくほんざ）だろ」

それから立川はひとくさり天人五衰の講釈



を垂れて、後を続けた。

「おい、守谷よ、おめえの（ごすい）は五つの衰えじゃなくて、昼寝の午睡だろ。天人午睡、即ち天人の昼寝だ」

一同爆笑。

会話が弾めば酒杯も重なり、自ずと酔いもまわってくる。談論風発、酔朋紅顔、しばし忘る現世の憂さ。

気がつけばいつの間にか季節は晩秋を迎えていた。時季外れの強い南風が吹いていた。

県境に近い町はずれの広大な公園の森をひとり歩いていると、木々の梢が大きく揺れてざわめいていた。曇りがちな空を見上げれば、森の上空をカラスの群れが羽ばたきもせず風に乗って遊び戯れていた。

一際強い風が吹いて、枝から吹き飛ばされた枯葉が盛大に宙を舞い、カサカサと乾いた音を立てて地面に落ちた。そうして地面に降り積もった落葉は、次の突風に煽られて押し流され、急流の水の流れのように地面や遊歩道の上を勢いよく奔った。

風に吹かれて飛ばされた枯葉がハラハラと降りしきる様を、私は時の経つのも忘れ、しばし見入っていた。そうしているうちに気がつい

たのだ。降りしきる枯葉に混じって白い綿毛のようなものがいくつも飛んでいることに。そして、ふと思いついた。よくよく見れば、その白い綿毛のようなものはただ風に流されているだけでなく、非力ながらも確かに自力で飛んでいるようでもあった。雪虫に違いなかった。森はいつしか鮮やかな秋色に染まり、やがて冷たい風に吹かれてその色を失っていく。そろそろこの森にも冬が近づいて来ているのかもしれないと私は思った。

森を抜けて北に進路をとり、公園北東地区の大池の縁に沿ってしばらく行くと、その先は緩い上り坂となつて、北端の高台、通称夕日の丘へと道は続いている。

丘の上には一軒の売店があり、その南側に大きく張り出した屋根の下には大きな木のテーブルとベンチの置かれたテラス席がある。私がこの公園を訪れる際、いつも休憩所として利用する場所だ。

坂道を上りつめてこの売店に辿り着くと、ちょうど三人の老人グループが席を立てて帰るところだった。三人はいずれも夏でもないのにサングラスを掛けていた。毎日ここで見かける顔ぶれだったが、妙な人たちだと私はかねがね

思っていた。彼らは天気の良い日にはいつもここに集まってきた。売店で缶チューハイとつまみとを買い、テラス席で小宴会を開いているのだ。それがほぼ毎日の習慣になっているらしい。それに、彼らの乗ってくる自転車もまた妙だった。車輪サイズは二十インチ、二十六インチと違ってはいても、いずれもハンドルのグリップが高い位置にくるタイプのエイブ・ハンドルだったのだ。映画『イージー・ライダー』の中でピーター・フォンダの乗っていたチョッパーを彷彿とさせるような自転車だった。

三人の老人たちはそれぞれの愛車に跨ると、売店前の坂道を勢いよく下つていった。

「相変わらずバカだよな、あいつら」

そう言ったのは隣のテーブル席にいた老人だった。この老人もまた毎日ここで見かけるメンバーの一人だった。顔が松村達雄に似ているところから、私は秘かにその老人を（おいちゃん）と呼んでいた。

「あいつら、竹ノ塚過激団だったのよ」

おいちゃんはそう言って頷いた。

「タケノツカカゲキダン？」

私は思わず聞き返した。

「そう、タカラヅカカゲキダンじゃなくてタケノツカカゲキダン。（カゲキ）はオペラの方じ

やなくて、過激派の（過激）ね。昔さ、そういう名前の暴走族がいたんだわ。あいつらはその残党」

おいちゃんのその話を聞いて、私の脳裏に遙か昔の記憶が甦った。

二十代の半ば、中型自動二輪免許を取って間もない頃、私はよく一人で四百CCのバイクに跨って国道四号線を走っていた。ある日、幸手辺りの案山子マークのうどん屋に立ち寄った際、駐車場に屯していた改造二輪のグループに声を掛けられた。仲間に入らないかとの勧誘だった。それが竹ノ塚過激団だった。彼らの勧誘に私は一瞬怯んだが、暴走族に入るつもりなどはさらさらなく、即座に断った。そこで絡まれるかと思っただが、意外にも彼らはあっさりと身を退いた。

あの時の残党がまだいるのかと私は驚いた。しかも、私が毎日通って来るこの場所に彼らもまた通い続けているとは……。

「思い出しましたよ。私も若い頃バイクに乗っていて、竹ノ塚過激団から入団の勧誘を受けたことがあります」

「そうだったの？」

「ええ。断りましたけど」

「そりゃあよかった。暴走族なんてろくなもん

じゃねえ」

「しかし、暴走族上がりでも、今じゃ皆さんすっかり好々爺になつていらつしやる」

「そうさなあ、みんな歳をとったからな」

おいちゃんは売店前にひろがる広い草地を眺めながら言った。

おいちゃんと挨拶以外の言葉を交わしたのは、それが初めてのことだった。私もおいちゃんに做って広大な草地に視線を向けた。緩やかに下っていくその斜面の先には、葉の茶色く染まりはじめた落羽松の木々が立ち並んでおり、その樹間から陽を浴びてキラキラと照り返す大池の水面が見えていた。

定年退職の場合、誕生日後の次の締日を退職日とすると会社の就業規則には定められている。そこで、十月二十七日生まれの私については、十一月十五日が退職日ということになった。残っていた有給休暇をすべて消化するため、その退職日から逆算して、九月二十三日から私は仕事を離れ、休暇に入っていたわけだ。

その退職日から一週間ほど経った頃、会社から離職票が送られてきた。日にちを置かずには近所の区民事務所に出向き、国民健康保険の加入手続きを済ませてきた。そして更に十日ほ

どすると、区役所から健康保険料の納付通知書が送られてきた。私はその納付通知書に印字されていた月額保険料を見て驚いた。驚きはすぐに怒りに変わった。

「ボツタクリじゃねえか！」

思わず私は声を上げた。国民健康保険の保険料が前年の所得を基準にして算出されることは私も知っていた。確かに、前年は給与所得と年金の雑所得があり、両方合わせればそこそこの所得があつたのも事実である。

しかし、会社の組合健保に納めていた保険料の個人負担分の四倍近い保険料を払わなければならぬとは、呆れて物が言えなかった。まさにボツタクリ以外のなにもでもなかった。被扶養者の分も含めた保険料としても、収入の半減してしまつた今、その負担はあまりにも重すぎた。これに介護保険料、所得税、住民税を加えると、もともと少ない年金の手取額は二十六パーセント減になってしまう。

「いやあ、まいったね……」

溜息交じりに言った私に、静子が尋ねた。

「何がそんなにまいったの？」

「これだよ、ほら」

私は区役所から届いた国民健康保険料の納付通知書を差し出した。

「いやあ、何なのよ、これ！」

静子もその納付額に驚いて嘆息した。

「なっ、ポツタクリだろ」

「何でこんなに高いのよ？」

「まあ、それだけ前年の所得があったということだよ。収入が年金だけになれば、その翌年からは保険料はかなり下がるはずだ」

しかし、その保険料が下がるのは、再来年の確定申告後のことになる。この先一年半近く高額な保険料を払い続けなければならぬわけだ。こんなことなら組合健保の任意継続にしておけばよかったのかとも思ったが、切り替えの時点では保険料の差額がどれほどなのかがわからなかった。まあ、今更どうしようもない。

「そもそも俺は病院通いなどしてない。年に一回歯科医院に行くかどうかで、ここ何十年と病気も怪我もしたことがないんだぜ。その俺が何でこんな高額な保険料を払わなきゃならないんだよ」

「うーん、保険だからね」

静子は言った。彼女はほんのちよつとした身体の変変でも、とにかく事ある毎に病院に行きたがる質だった。そんな彼女にとって健康保険証はなくてはならないものだったのである。

「でも、ちよつと高いわねえ」

家計を仕切る身としては、やつぱり支出額の増加は気になる場所だったのだろう。

いつの頃からか、私はテレビにまったく興味を失っていた。たぶん、パソコンを使うようになってからだから、三十七年ほど前のことになるだろうか。以来、テレビを見るのは朝昼晩の食事時のみ、それも好んで見るのは専らニュースと旅番組に限られている。食事が済めば、番組の途中でも躊躇なく席を立ち、次の行動に移るといった具合である。大抵はその後パソコンの前に陣取ることになる。

ある日のこと、私は散歩から帰ってきてて昼食をつくり、それが出来上がったところで居間兼食堂に移動して、テレビのスイッチを入れた。すると思いの外大きな音がテレビのスピーカーから聞こえてきた。驚くほどの大音量というのではなかったが、それは私にとって最適な音量をいくらか超えていた。その朝、静子が仕事に出かける前にテレビを見ていたはずだから、音量を上げたのも彼女に違いなかった。私はリモコンを操作して音量を数段下げ、昼のニュースを見続けた。

以前はこんなことはなかった。いくらか耳が遠くなったのだろうか。そう言えば、向かいの

家のおばさんが訪ねて来て声を掛けても、静子は時々気づかないことがあった。

私より七歳下の静子の聴力が早くも衰えてきたというのだろうか。私はしばし考え込んだ。対面で話している時にはごく普通に聞き取れてはいるようだ。もしかしたら、ある特定の周波数帯の音だけが聞き取りづらくなっているのかもしれない。これもやはり老化の兆候には違いなく、現実をただ受け入れるしかないのだろう。とりあえず今のところは特段の支障はないし、本人もまったく気にもしていないようだ。それにしても、荊妻もいよいよ歳をとったかと思うと、私は何となく寂しい気分になった。

年を越し、春が来て、次男が家を出た。

その数ヶ月前、近隣の小都市に転勤が決まり、以来彼は片道二時間近い時間をかけて勤務先に通い続けてきたのだった。やつぱりどこかで無理をしていたのだろう。週に二日の休みがあるとはいえ、毎日それだけの時間をかけて通うのが苦痛になってきたに違いない。そこで、遂に勤務先の近くにアパートを借りることにしたようだ。

転居することについて、次男からは事前の相談はなかった。一人で不動産屋に行き、借りる

部屋を決めてきてしまったのだ。賃貸契約書の保証人欄に署名・捺印を求められたその時になつて、私は初めて次男が家を出るつもりであることを知った次第である。それが仕事上の都合であるならば、否も応もなかった。

しかし、母親である静子にしてみれば、家族が欠けることには身を切られるような辛さや寂しさがあつたものと思われた。次男が家を出ていくと知つた静子は、その後しばらく気分が塞ぎがちのようだった。

そして数日後、静子はこう言ったのだ。「彼女ができたんだわ。きっとそうに違いないわよ」

断定的な物言いはいかにも確信に満ちているようだった。

「あいつは、若い頃の俺に似ていい男だし、モテるからな。彼女の一人や二人できて当たり前だろ」

「そういうことじゃないのよ」

「どういうこと？」

「お父さんも鈍いわね。彼女ができてアパートを借りたつていうことは、同棲するつもりなんじゃないの」

「なるほど、そういうことか。彼女ができたという仮定が事実だとしたら、そういうこともあ

り得るな」

「仮定じゃない。事実なのよ。そうに決まっているわ」

思い込みの激しい静子は、頑として自説を曲げようとはしなかった。それはそれで、彼女の確信はある種の女の直感に基づくものだったのかもしれない。

次男は三月の初めに近隣の小都市に引越して行つた。そしてその三か月後、突然彼女を連れて我が家にやって来たのだった。

二人はすでに結婚の意思を固めているようであつた。

これに大いに刺激を受けたのが長男である。

長男はこれまで異性とはほぼ無縁だった。関心がなかつたわけではないのだろうが、高校や大学在学中も、会社勤めをするようになってからも、専ら男友達とばかり遊んでいた。暇さえあればサーフィン・キャンプ・ゴルフと遊び惚けていたが、いずれにしても異性と出かけたような様子はまったくなかった。

そんな彼も気がつけばいつの間にか三十二になろうとしていた。友人たちの大半がすでに結婚して家庭を築いていた。彼の中にも焦りが生じ始めていたことは想像に難くない。

私も静子もそんな長男を気にかけてはいたものの、周りにこれと思うような若い娘もおらず、途方に暮れるばかりだった。今の時代、近所や親戚に世話焼きを期待することも難しくなっている。

「お父さん、会社にいい人はいないの？」
いつだったか、静子が私に尋ねたことがあつた。

「うーん、俺の勤め先は印刷工場だからね、女の子は少ないんだ。でも、一人だけ気に入った子がいる」

言いながら、私は藤野由里子のことを思い出していた。色白で目のパッチリとした、こけし人形のような顔立ちの美人だった。彼女なら人柄も良さそうだったし、長男の嫁になってもらえたらよいのにと私は秘かに考えていたのだ。「しかし、その子は俺の持ち場の工場とは別棟の事務所勤めだから、滅多に話をする機会がなくてね……」

「つまり、接触する機会がないってことね」

「そう、息子と付き合ってみないか、なんていきなり言うわけにもいかないだろ」

結局、藤野由里子は私が退職する前に会社を辞めてしまい、その後彼女の消息はふつりと絶えてしまったのだった。

次男が婚約者を家に連れてきて何か月もしないうちに、長男の行動に変化が表れた。休みの度、ほぼ毎週のようにサーフィンをしに外房の海に通っていた彼が、海には行かなくなったのだ。相変わらず休みになると何処かに出かけてはいたが、サーフ・ボードが家に置いたままになっていたので、海に出かけたのではないことは明らかだった。

そして、更に数ヶ月が経った年末のある日、長男は唐突に結婚すると言い出した。その降って湧いたような話に静子が吃驚したことは言うまでもない。それはまさに青天の霹靂だった。「……それで、相手はどういう人なの？」

動揺しつつも、静子は長男にそう尋ねてみた。それをきっかけに、どこに住んでいるのか、どんな会社に勤めているのか、性格はどうか、年齢は、学歴は、家族はと矢継ぎ早に質問を投げかけたが、それらの答えを聞いたところで表面的な属性を知るのみで、妄想やら偏見を膨らませるだけのことになる。結局、実際に会ってみたいことにはその人となりはわからないという結論に至り、とにかく一度家に連れて来るよう長男に言い含め、この話は終わった。

このことがあってから、静子はしばらく塞ぎ込んで、私にも長男にも話しかけることが極端

に少なくなっていた。長男の結婚のことで何やら思い悩んでいるらしいことはわかったが、こういう話はあるようにしかならないと私自身は達観していた。縁とはそういうものだ。

正月を迎えて二週間ほどが経った頃、長男は彼女を家に連れてきて私たちに紹介した。実際に会って話をしてみれば、気さくでなかなか感じのよいお嬢さんだった。それで静子もやっと納得がいったようだった。

それから話ほとんどん拍子に進み、その数日後には会社の寮に入居が可能になったと長男から報告があった。寮は港区三田の高台にあり、二月一日から使えるとのことだった。かくて新居も決まり、そこから長男夫婦の新生活が始まることになったという次第である。

こんなふうには運気というものは時に怒涛のように次々と押し寄せてくることもある。長男はうまくその波を捉えて乗ったと言つてよいのかもしれない。

それにしても、あまりにも急な話だった。その急な展開に静子が翻弄され、不安を覚えたのも無理はなかった。しかし、落ち着いて考えてみれば、そうなる運命だったとしか言いようがなかったのだ。所詮、人は運命に抗うことはできない。静子も私も、ひたすら長男が幸せにな

るよう祈るしかなかった。

次男が家を出て一年近くが経った。そして今度には長男がそれに続き、家を出て新生活をはじめようとしている。それぞれの結婚も近い。

こうして二人の息子たちが家に居なくなつてみると、私の人生の時間割もまた一コマが終わったような気がする。

しかし、まだ次の一コマがある。家族が増えるのだ。一緒に住むことはないにしても、家族が増えることに違いはない。一年先、二年先には、さらにまた家族が増えているのかもしれないと私は思った。

一月も末近いある日、私は静子を誘って鹿浜橋近くの荒川右岸にある公園に出かけた。この季節にしては珍しく風のない穏やかな冬晴れの日だった。

園内北側の梅林に行つてみると、仄かに梅の香りが漂っていた。八重の紅梅がもうだいぶ咲いていた。その梅林の下草の中、あちこちで福寿草の鮮やかな黄色い花が暖かな陽射しを浴びて輝いていた。

「私たちの人生、まだまだこれからだよね」
静子が春の息吹に感応したように微笑を浮かべて言った。
(二〇二三年一月三一日)